ボートレース広報誌
【プロペル】 Vol. 4 2010

PROpel

もっとボートレースを

特集 ボートレースと地域振興

ボートコース水質浄化プロジェクト
うちわを核にしたまちづくり
「ヤギを作ってアフリカに贈ろう！」プロジェクト
水への感謝の気持ちを胸に交流を深める「かっぱリング」
収益金の配分
地方自治体の財源として活用

CONTENTS

02 特集
ボートレースと地域振興

04 ボートコース水質浄化プロジェクト
戸田ボートレース場（埼玉県戸田市）

07 うちわを核にしたまちづくり
丸亀ボートレース場（香川県丸亀市）

08 「ヤギを作ってアフリカに贈ろう！」プロジェクト
江戸川ボートレース場（東京都江戸川区）

09 水への感謝の気持ちを胸に交流を深める「かっぱリング」
福岡ボートレース場（福岡県福岡市）

10 収益金の配分

11 地方自治体の財源として活用

12 HOPE!
無限の可能性を秘めたスター候補

【プロペル】
PROpel

ボートレース広報誌「PROpel」は、みんなに楽しんでいただけるボートレースの実現に向けた関係者の姿と、社会の様々な分野での貢献の様子を紹介していきます。

特集

ボートレースと地域振興

多くの人々に興奮や感動を与えるボートレース。その収益金は地方自治体の大きな収入源になっており、地域の振興に多大な貢献をしてきました。ボートレースはもともと『モーターボート競走法』（下記参照）に定められているように、「地方財政の改善を図る」ことを目的としており、レースを主催する施行者も県市町が主体となっています。今回はボートレースがかかわってきた地域振興の事例をいくつかご紹介します。収益金だけでなく、ボートレースの存在そのものが地域の活性化につながる事例もあります。

ボートコース水質浄化プロジェクト
戸田ボートレース場（埼玉県戸田市）
4ページへ

うちわを核にしたまちづくり
丸亀ボートレース場（香川県丸亀市）
7ページへ

「ヤギを作ってアフリカに贈ろう！」プロジェクト
江戸川ボートレース場（東京都江戸川区）
8ページへ

水への感謝の気持ちを胸に交流を深める「かっぱリング」
福岡ボートレース場（福岡県福岡市）
9ページへ

モーターボート競走法
［第1条（趣旨）］
この法律は、モーターボートその他の船舶、船舶用機関及び船舶用品の改良及び輸出の振興並びにこれらの製造に関する事業及び海難防止に関する事業その他の海事に関する事業の振興に寄与することにより海に囲まれた我が国の発展に資し、あわせて観光に関する事業及び体育事業その他の公益の増進を目的とする事業の振興に資するとともに、**地方財政の改善を図るために行う**モーターボート競走に関し規定するものとする。

戸田ボートレース場｜埼玉県戸田市

ユニークな発想で取り組む ボートコースの 水質浄化プロジェクト

70年以上の歴史を持つ、埼玉県戸田市にある「戸田ボートコース」。1964年（昭和39年）の東京オリンピックでボート競技の公式会場に採用されたことでも有名です。この戸田ボートコースで2006年から進められている、貝を使ったユニークな水質浄化プロジェクトに注目が集まっています。このプロジェクトにかかわる皆さんからお話をうかがいました。

■ 埼玉大学大学院
理工学研究科
永澤明教授（左）

■ 埼玉県ボート協会
理事長
和田卓さん（右）

40年間、水の入れ替えがないコース

「戸田ボートコースで取り組んでいるのは、池蝶貝（いけちょうがい）という二枚貝を用いたコースの水質浄化プロジェクトです」と話すのは、埼玉県ボート協会で理事長を務める和田卓さん。東西2,400m、南北90mという全国有数の規模を誇る戸田ボートコースは、雨水によって水量が維持されています。川の水を引き入れる必要がないため、東京オリンピックでコースを使用してから現在まで、40年以上にわたって水の入れ替えを行っていません。和田さんによると「池のような状態」なのだそうです。

現在、戸田ボートコースの周辺一帯は県営戸田公園として整備され、地域住民の憩いの場となっています。しかし、コースの水は年々濁りが目立ち始め、特に夏場にはアオコが発生し、悪臭が気になる日もあるそうです。

「アオコは水面の近くまで浮く性質があるので目立ちますし、選手がオールで漕ぐと水しぶきに混じってボートや服を汚してしまいます。臭いだけでなくいろいろな弊害があり、これは何とかしなければと思いました」（和田さん）。

良好な状態の水質

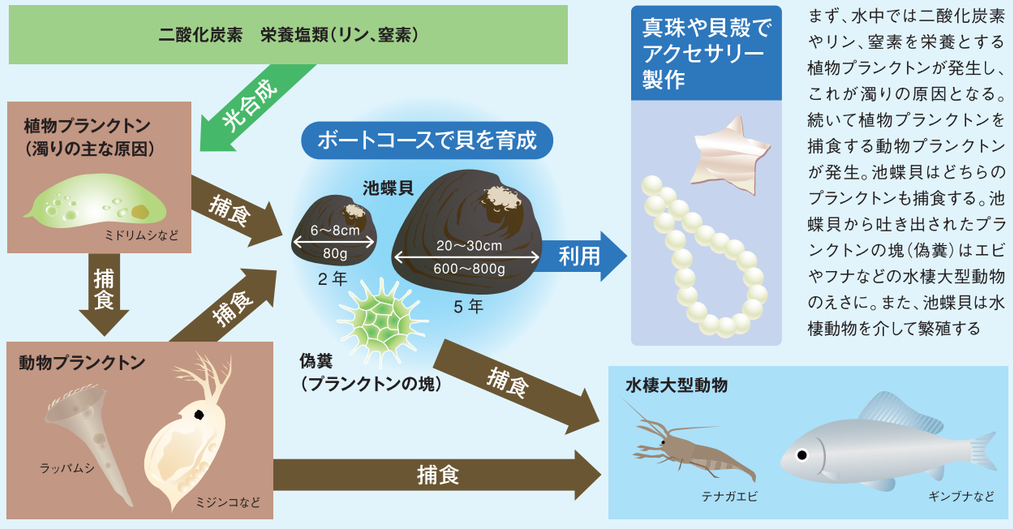
ボートコースの浄化を行うにあたり、まずは水質を正確に把握する必要がありました。そこで以前から親交があった、埼玉大学大学院理工学研究科の永澤明教授に科学的な分析を依頼しました。永澤教授は同大学科学分析支援センター所属の藤原隆司准教授（化学分析担当）と是枝晋講師（生物相分析担当）とともに、戸田ボートコースの水質調査を行いました。「水に含まれる酸素や窒素、また微生物の量や透明度など14項目にわたり詳細な調査を行いました」と永澤教授。その結果、戸田ボートコースの水質は良好な状態であることが判明しました。底にはプランクトンの死骸や泥などが堆積しているものの、ボートコースの水は、特に有害な物質を含んでいるわけでもなく、大きな問題はありませんでした。

「周囲から閉じた環境にある戸田ボートコースには、生活排水などが流れ込んで来ません。水質には様々な基準値がありますが、ボートから落ちて、多少の水を飲んでしまったとしても差し支えないレベルといえます」と永澤教授。戸田ボートコースの水が汚れているように見えるのは、アオコのような植物プランクトンの増加による濁りが原因だといいます。

濁りを浄化する池蝶貝の力

水質を改善するためには、空気の吹き込みや水の入れ替え、化学的な処理などの方法がありますが、いずれも多額の費用がかかるのが難点。そこで埼玉県ボート協会が考えたのは、プラ

■ 戸田ボートコースにおける水棲生物の関係



まず、水中では二酸化炭素やリン、窒素を栄養とする植物プランクトンが発生し、これが濁りの原因となる。続いて植物プランクトンを捕食する動物プランクトンが発生。池蝶貝はどちらのプランクトンも捕食する。池蝶貝から吐き出されたプランクトンの塊（偽糞）はエビやフナなどの水棲大型動物のえさに。また、池蝶貝は水棲動物を介して繁殖する

ンクトンをえさとする池蝶貝を使って水の浄化を試みるという方法でした。

「池蝶貝というのは、もともと琵琶湖に生息している二枚貝の固有種です。5年ほどたつと大きさ20〜30cm、重さ600〜800gに成長して、より多くのプランクトンを吸い込むようになります。機械などを使って浄化する方法に比べてコストが抑えられるほか、外国産の生物ではないので生態系にも優しいと考えました」と和田さんは当時を振り返ります。永澤教授の協力のもと、ボートコースから汲んできた水の中に池蝶貝を入れる実験を行ったところ、半日ほどで水がクリアになることを確認。戸田ボートレース場の施行者である戸田競艇組合などからの援助を受けて、2006年から現在までの間に約2,500〜3,000個の池蝶貝を水中に沈めました。

「計算上、21,000個の池蝶貝があればコース全体の水を5年間で半分まで浄化することができます。池蝶貝は年々成長して浄化能力が上がりますし、また、水中で貝が自然繁殖することも期待できると考えています」と永澤教授。今後も毎年500個程度の池蝶貝を投入していく予定です。

右下が投入時の池蝶貝。時計回りに2年、4〜5年飼育したもの。4〜5年で数倍の大きさになる

■ 池蝶貝のろ過能力

貝1個体（100g）が水をろ過する速度

0.3リットル／時間（15〜25℃）

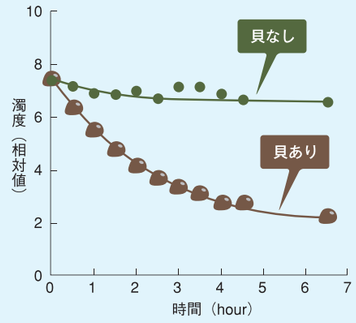
戸田コースの濁度を5年で半分にするためには、

ボートコースの浮遊物量	10mg/リットル
ボートコースの水量	5億4,000万リットル
コース全体の総浮遊物量	5,400kg

必要な貝（100g）の個体数は、21,000個体

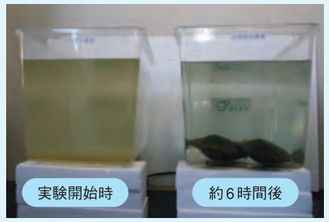
■ 池蝶貝を入れた場合の水の濁度の変化

ボートコースの水3リットルに貝150gを投入



■ 池蝶貝の浄化実験

戸田ボートコースの水に池蝶貝を投入。数時間後には水は見違えるようにきれいに



採取した真珠をボートレースの副賞に

「池蝶貝は寿命が約40年と非常に長いのですが、戸田ボートコースの池蝶貝は淡水真珠を採取するために5年ほどで引き上げます」(和田さん)。色彩豊かな真珠は、外套膜(がいとうまく)という池蝶貝の一部を切り取って殻の中に入れると、それを核として作られます。今、埼玉県ボート協会ではこの真珠や貝殻を使ったアクセサリー製作にも力を入れていて、埼玉県で開催されたインターハイの記念品として使われたこともあるそうです。また、「昨年戸田ボートレース場で開催したSG競走の優勝者に、副賞として真珠をプレゼントしましたが、とても喜ばれました」と語るのは戸田競艇組合の岡﨑秀昭さん。ほかにも、地域の方々を対象にアクセサリー教室を開いたところ非常に好評で、「将来的には商品の売り上げで浄化コストの回収も目指したい」と、和田さんは夢を語ります。

戸田ボートコース産の真珠と貝殻で作ったストラップ

ボートへの思いが結んだ協力の輪

埼玉県ボート協会や埼玉大学、戸田競艇組合など、様々な組織が協力することで実現した水質浄化プロジェクト。実は、「ボート好き」という共通点がスムーズな協力体制を作り上げたのだと和田さんはいいます。

「私はボート選手出身で、インターハイ出場の経験があります。永澤教授も元ボート選手で現在は埼玉大学ボート部の顧問を務めておられますし、戸田競艇組合の岡﨑さんもボート仲間。いわばボート好き同士が声を掛け合って始めたプロジェクトなのです」。

学生時代に戸田ボートコースを初めて訪れた時、和田さんはその整備された環境に心から感激したといいます。愛着のあるボートコースに何とかして昔のきれいな姿を取り戻したい、そんな純粋な思いが浄化活動を続ける原動力になっているのだそうです。

「今年、これまでの活動をより本格的に行うために『戸田ボートコース水質浄化実行委員会』を立ち上げました。また、戸田ボートコースでのノウハウを活かして、東京の有栖川公園などでも試験的に池蝶貝を使った浄化が行われています。気候や水質など環境との相性もありますが、素晴らしい浄化方法だと思いますし、これからも広くアピールをしていければ」と、力強く和田さんは語りました。

池蝶貝は引き上げやすくするためのパールネットに入れられ沈められる。ネットは砂の代わりに貝を外敵から守る働きも果たす

戸田ボートコース

日本を代表するボートコース。西端には戸田ボートレース場があり、東端には国立スポーツ科学センター、埼玉県立の艇庫のほか、大学、実業団チームなどの艇庫が並ぶ。毎年、全日本選手権や学生選手権をはじめ、市民大会や大学内での大会などが行われている。また、ロケ地としてテレビドラマにもたびたび登場している。

ADDRESS●埼玉県戸田市戸田公園5-27
ACCESS●JR埼京線「戸田公園」駅下車 徒歩15分

丸亀ボートレース場｜香川県丸亀市

伝統を次代に、世界に伝える うちわを核にしたまちづくり

うちわの港ミュージアム
うちわの総合博物館。丸亀うちわの歴史やうちわ作りの模型人形、文献、全国の主なうちわも展示。実演コーナーでは職人の技を間近で見られるほか、実際にうちわ作りを体験することもできる

古くから伝わる特産品をまちの活性化につなげる試みが香川県丸亀市で行われています。日本一のうちわの産地である同市では1995年、観光と後継者育成の拠点として「うちわの港ミュージアム」をオープン。15年後の現在、うちわの魅力は世界にも発信され始めています。

特産品のPRにボートレースも協力

江戸時代初め、金毘羅詣のおみやげ品として作られたのが始まりとされる丸亀うちわ。江戸時代には武士の内職として、明治時代以降は地場産業として発展を続けます。1997年には国の伝統的工芸品に指定され、現在の年間生産量は約1億本、国内シェア90%を誇ります。この丸亀うちわの魅力と伝統を伝える中核を担っているのが、うちわの港ミュージアムです。

香川県うちわ協同組合連合会理事の長戸幸夫さんはミュージアム開館の目的を次のように語ってくれました。「当時、丸亀うちわの伝統、文化を伝える場がありませんでした。技術を後世に伝えるためにも資料館が必要でした」「丸亀うちわは主に販促物として活用されています。したがって取り引きは会社同士になり、一般のお客さまは直接購入できませんでした」。技術の継承者を育成し、より多くのお客さまにうちわを手にとってもらえる機会を提供したい ——。このような思いからミュージアム開館計画が持ち上がりました。当初は丸亀城近くに国の補助金によってミュージアムを建設する予定でしたが、バブルの崩壊により補助金が削られ、計画が行き詰まります。そこで、丸亀市は丸亀港近くにあった民間のレストランを買い取り、ミュージアムに改装。この費用の一部にボートレースの収益金が使われました。

「昨年はボートレースのナイター開催PR用として、6万本ものうちわを発注いただきました。また、丸亀お城まつりの時もスポンサーになっていただき、片面に“丸亀お城まつり”、もう片面にボートレース場の名前を入れたうちわを作成しました」「ボートレース場があることによって、県外からもお客さまがいらっしゃり、ミュージアムにも立ち寄ってくださいます。収益金だけではなく、集客面でもボートレースは貢献してくれていると感じます」(長戸さん)。

竹うちわのしなり、風の心地よさを世界の方に感じてもらいたい

うちわ協同組合連合会では「丸亀うちわ後継者育成講座」などを開催し、後継者の育成にも力を入れています。2001年には講座の修了生が丸亀城内に、うちわの製作実演販売を行う「うちわ工房」をオープン。新たな観光の目玉が誕生しました。

さらには、世界に向けた発信も始まっています。2008年の北海道洞爺湖サミットの会場に展示され、地球環境に配慮した道具として注目を集めました。「竹うちわのしなり、風の心地よさを世界の方に感じてもらいたいですね」と長戸さん。さらに装飾品としての魅力を伝えることにも力を入れているといいます。

「4年前からは日本グラフィックデザイナー協会との共催で『FUNFAN展』を開催しています。これはデザイナーのデザインをもとに製作したうちわを展示したもので、初年度は日本グラフィックデザイナー協会の会員の作品のみでしたが、翌年には海外のデザイナーにも参加していただきました。また、イタリアや台湾、タイなど海外での開催も行い、大変好評でした」。長戸さんは丸亀うちわを世界に広めていくことに手ごたえを感じているようでした。

うちわの港ミュージアム

ADDRESS●香川県丸亀市港町307番地15
TEL 0877-24-7055　FAX 0877-43-6966
開館時間●9:30～17:00(入館は16:30まで)
休 館 日●毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
年末年始(12月28日～1月4日)
入 館 料●無料

江戸川ボートレース場｜東京都江戸川区

ボートレース場が結ぶ日本とアフリカ、親子の笑顔「ヤギを作ってアフリカに贈ろう！」プロジェクト

会場からは「こうやったほうがいいよ！」、「お母さんのより私のヤギさんの方がかわいい！」と楽しそうな親子の会話が

ボートレース場での楽しい思い出づくり

「地元の方が気軽に来て、交流できる —— ボートレース場がそんなコミュニティの場になれたら、と考えています」。江戸川ボートレース場で様々なイベント企画を担当している関東興業株式会社の土屋泰伸さんは、地域とボートレース場のあり方について語ってくれました。

全国のボートレース場では、家族や親子が近くのボートレース場で一緒に楽しめるように、これまでも子どもを対象にした「ゴムボート大会」などのイベントを実施してきました。江戸川ボートレース場ではこのようなイベントに参加した子どもが大人になり、社員採用試験を受けに来たことがあったそうです。「たまたま私が彼の面接を担当したのですが、嬉しかったですね。彼の中ではボートレース場が幼い頃の楽しい思い出の一つになっていたのですから」。土屋さんはその時、あらためて地域の中でボートレース場が果たすべき使命を感じたそうです。

「楽しくて世の中のためになることをしよう」という思いがきっかけ

このような思いから、江戸川ボートレース場では『ヤギを作ってアフリカに贈ろう！』プロジェクトを実施することにしました。これは場内で新聞紙を使ってヤギの人形を作るワークショップを実施し、その収益金でアフリカのエイズに苦しむ家族に本物のヤギを贈るというものです。もともとは建築家の遠藤幹子さん（office mikiko）と国際協力NGO ジョイセフ（家族計画国際協力財団）が始めたものでしたが、その趣旨に江戸川ボートレース場が賛同、共同でプロジェクトを行うことになりました。

「この共同プロジェクトを考えたのは昨年の11月くらいでした。景気が悪い時期だからこそ“楽しくて、世の中のためになることをしよう”と思いました」（土屋さん）。

江戸川ボートレース場にはハズレ舟券を“食べる”ヤギ・ロボット「マッシロー」が設置されており、土屋さんは“ヤギ”が縁で遠藤さんの活動を知り連絡を取りました。

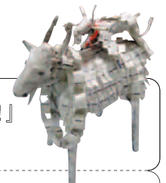
「ボートレース業界の方ってどんな人たちだろう、と思っていましたが、実際にお会いしたら私たちの活動の趣旨を十分にご理解いただいているし、何よりも“楽しくやりたい”という姿勢に共感できました」と遠藤さん。

こうして今年1月31日（日）、江戸川ボートレース場では初となる「ヤギさんワークショップ」が開催されました。参加者は近隣の小学生とその親などを中心とした約60名。冒頭、アフリカでのエイズの現状を遠藤さんが参加者に説明。現地の写真のスライドに子どもたちは真剣に見入っていました。

そしていよいよヤギの人形作りの開始です。今回はボートレース場での開催ということで、ハズレ舟券をヤギの飾り付けに使うというスペシャルバージョンです。遠藤さんの指導に従って、子どもたちはお父さんやお母さんと一緒に、楽しそうにヤギを作っていきます。

「ワークショップの幅がさらに広がったような気がしました」と遠藤さん。土屋さんも「江戸川ボートレース場の定番イベントにできたら」と、親子で楽しめる場を提供しながら、社会貢献もできるこのプロジェクトの継続に意欲をみせています。

なお、プロジェクトの一環として場内に募金箱を設置するほか、ボートレーサーにも協力してもらい「チャリティーオークション」も開催。最終的には、80頭以上もの“本物のヤギ”がアフリカに贈られる予定となっています。



『ヤギを作ってアフリカに贈ろう！』プロジェクトのしくみ

ワークショップの参加費1,000円のうち材料費を除いた500円が国際協力NGO ジョイセフへ寄付され、ジョイセフはエイズウィルス（HIV）感染者の家庭につがいのヤギ1組を贈ります。家族はそのヤギのミルクを飲んだり、生まれた子ヤギを売ったりして生計を立てます。

募金箱とヤギの人形を展示。プロジェクトの意義を伝える

福岡ボートレース場｜福岡県福岡市

筑後川の恵みを受ける住民が水への感謝の気持ちを胸に交流を深める「かっぱリング」

地域を超えた友だちができることが子どもたちにとって大きな喜び。まさに筑後川を介して、交流の輪が広まってきている

福岡都市圏の共通する課題にボートレースの収益金を活用

九州北部を東西に悠々と流れる筑後川。この筑後川から水の恵みを受けている地域住民が交流しながら、水の大切さを学んでいく活動 ——「福岡都市圏流域連携基金事業」が続けられています。この事業を担っているのが福岡都市圏広域行政事業組合。実は同組合は福岡のボートレースの運営も行っており、その収益金の一部がこの事業に使われています。

福岡都市圏は水資源が乏しく、1978年（昭和53年）の大渇水など何度も大きな渇水を経験してきました。しかし、1983年に筑後川からの導水が始まったことなどから大きな渇水は起こらなくなっています。

「現在、福岡都市圏では生活用水の3分の1を筑後川からいただいています。筑後川に感謝をし、筑後川流域に住む人々と交流を深めようというのがこの事業の趣旨です」「ボートレースの収益金は地方財政として使用されることが法律（モーターボート競走法）で定められています。私たちは市町の個別の課題ではなく、共通する課題に役立てることを方針としています。福岡都市圏の共通の課題はやはり“水”ですので、水に関する事業に収益金を使っているというわけです」（同事業組合）。

筑後川流域の住民と福岡都市圏の住民をつなぐかっぱリング

2000年から活動をしている「かっぱリング」もこの事業の一つ。名前の由来は筑後川に昔から伝わるかっぱ伝説の“かっぱ”と交流の輪“リング”を合わせたもので、水源を守るため筑後川流域と福岡都市圏との連携を強化するという意味が込められています。内容は、植樹や渓流釣りなどの川遊び、バーベキュー、サッカー大会など実に多彩。ふだんは交流の機会が少ない住民同士がこうした活動を通じて水や環境について共通の理解を深めています。

「子どもを通じた活動が多いので、まず子どもたちに水の大切さを知ってもらうことを目指しています。ふだん飲んでいる水はどこから流れてきているのか ——、それを知ることで水に対する意識が少しずつでも変わり、それが大人にも広まっていくことを期待しています」「将来のある子どもたちに川や海、森を守るという気持ちが芽生えることはとても有意義ですので、かっぱリングはこの先もずっと続けていきたいと思っています」（同事業組合）。

そのほかにも筑後川流域の特産物を集めた『ありがとう「水」交流物産展』や水の大切さを啓発するキャンペーンなど、福岡都市圏広域行政事業組合では、水に関する様々な活動を展開しています。

「大規模なことをするのではなく、せっかく根付いてきたこれらの事業を大切にして、地道に水の大切さを訴えていきたいと考えています」（同事業組合）。

水源を守るため植樹を行う

収益金の配分

ボートレースの収益金は施行者、日本財団などを通して、人々の暮らしに役立てられています。

ボートレースファン

舟券の購入

払戻 売り上げの75%

全国24ヵ所でレースを開催するボートレース場　売り上げの25%

施行者（レースを開催する全国地方自治体）

日本財団への交付金

約2.6%

＜交付金の使途＞
1号交付金
モーターボートその他の船舶、船舶用機関及び船舶用品の改良及び輸出の振興並びにこれらの製造に関する事業及び海難防止に関する事業その他の海事に関する事業の振興
2号交付金
観光に関する事業及び体育事業その他の公益の増進を目的とする事業の振興

（財）日本モーターボート競走会への交付金

約1.2%

＜交付金の使途＞
競走の審判、競走に出場する選手の検査、競走に使用するボート・モーターの検査、その他競技運営

地方公共団体金融機構への納付金

約1.1%

＜交付金の使途＞
公営企業（ガス、水道、病院など）に係る地方債の利子補給

開催経費

実 費

管理費、人件費、選手賞金、施設費など

施行者収益

＜収益金の使途＞
道路整備、再開発事業の促進、学校、病院などの公共施設の建設、その他教育費、土木費、保健衛生費、公営住宅費など

地方自治体の財源として活用

教育費

学校施設の整備や美術館、体育館、プール、公民館の建設などに使用されています。

公営住宅費

主に公営住宅の建設に使われます。

土木費

街路樹や公園、歩道の整備など、暮らしやすく美しいまちづくりのために活用されています。

大野海岸（愛知県常滑市）：
“日本最古”といわれるほど古い歴史を持つ海岸。伊勢湾台風で壊れてしまった海岸が整備工事により美しく生まれ変わりました

消防費

消防車の整備のほか、消防設備、防災無線の整備などに使われます。

保健衛生費

病院の建設のほか、清掃施設の建設に用いられています。

民生費

高齢の方が安心して暮らせる社会環境づくりや「特別養護老人ホーム」などの建設、障害者や児童などをサポートする各種福祉施設の建設などに活用されます。

産業経済費

地域の観光地や観光資源の整備に活用。商工業や観光の拠点となる商工会館などの建設にも役立っています。

唐津城の修復工事（佐賀県唐津市）：
年間12万人が訪れるという唐津城。2008年から約8年にわたる大規模修復工事が行われています

災害復旧費

集中豪雨や台風などにより被害を受けた土地を現状復帰させる費用。大規模な災害などでなく、比較的規模の小さい災害で活用されています。

公害対策費

主に地方公共団体が行政的に取り組む公害（典型7公害*）対策に使われます。
＊ ①大気の汚染、②水質の汚濁、③土壌の汚染、④騒音、⑤振動、⑥地盤の沈下、⑦悪臭

その他

コミュニティホールやコンサートホール、庁舎建設やコミュニティバスの運営、地域交流推進事業などに活用されています。

ボートレースの社会貢献がよく分かるWebサイト ――「きょうも、ていちゃん。」

アザラシの「ていちゃん」による、ボートレースの社会貢献がよく分かるサイト。テレビCMと連動したものになっていて、収益金がどのように使われているか、分かりやすく紹介されています。

■ Webサイト「きょうも、ていちゃん。」
http://www.teichan.jp/

第３回
HOPE!
無限の可能性を秘めた
スター候補★

元スター選手の植木通彦氏をコメンテーターに迎え、
スター候補選手の可能性と人間的魅力を紹介します

冷静な駆け引きから勝機を見極める

プロデビューからわずか3年という早さでSG出場を果たし、2009年の最優秀新人選手を受賞した平山智加選手。女子レーサーの記録を次々と塗り替えるなど、きわだった活躍をしています。平山選手の強さの源やファンの皆さまに対する思いを、植木通彦氏との対談を通じて語っていただきました。

スター候補選手 登録第4387号（香川）

平山智加選手 × 植木通彦氏

Chika Hirayama × Michihiko Ueki

平山選手の 生い立ち、プロになるまで

幼少時からバスケットボールを続け、身長156cmながら地元香川県の強豪私立高校のポイントガードとして国体やインターハイなどの全国舞台で活躍。高校３年生で引退し、目標を失って進路に悩んでいたところ、ボートレースファンだった父の勧めからボートレーサーを目指すようになる。

やまと競艇学校へは２度目の受験で合格。奇しくも、バスケットボール部時代に対戦し、お互いに顔見知りの関係だった鈴木祐美子選手と同期となる。物怖じしない性格はボートの操縦以外にも発揮され、講師としてやまと競艇学校を訪れた当時の植木通彦選手とも堂々と話をしたという。

競艇学校を優秀な成績で卒業して2006年３月に選手登録。同年５月に地元の丸亀ボートレース場でプロデビューを果たす。

バスケットボールの世界で 鍛え抜かれた能力

植木　平山選手は高校時代、バスケットボールで全国大会に出場した経験があるそうですね。

平山　小学生の時から10年間続けました。ポイントガード*としてずっとレギュラーでプレーしていましたが、強豪校だった高校では補欠に回り、「お前みたいな選手はいらん」とまで言われました。しかし、その先生を何とか見返したくて、努力の結果３年生でレギュラーを獲得し、インターハイや国体にも出場することができました。

植木　先生の指導がバネになったわけですね。それは貴重な経験だったと思います。平山選手にとって、バスケットボールの経験がレースのどんなところに活きていますか。

平山　パスと見せかけてドリブルをするような、状況を見て逆をつく動きですね。たとえば、“まくる”と思わせて“差す”とか、減速と見せかけて加速するような駆け引きに役立っていると思います。バスケットボールでは、コート全体を見て人とボールの動きを瞬時に判断する能力を磨きました。私は体が小さかったので、視野の広さを武器にしないと生き残ることができなかったのです。

植木　視野の確保は水面の上でも重要な要素です。レース中でも常に全体の状況が見えているわけですね。平山選手がボートレーサーを目指そうと思ったきっかけは何でしたか。

平山　部活に全力を出し切って引退し、目標を失った中でボートレースファンだった父に勧められたのがきっかけです。

植木　やまと競艇学校に入学してみてどうでしたか。１年間でプロになるために必要とはいえ、指導や生活環境には厳しさを感じたと思います。

平山　部活の厳しい指導に耐えたという自信もあり、覚悟はできていました。それに、やまと競艇学校の教官も部活の先生と同じく、厳しさの中に温かさが感じられました。ほとんど休みがないのは辛かったのですが、必死についていきましたね。覚えることも多くて、卒業するまでまったく余裕はなかったです。

初優勝へのプレッシャーは 感じなかった

植木　やまと競艇学校を卒業し、2006年３月に選手登録された平山選手は、５月のプロデビュー４走目でいきなり１着をとりました。その時のことはよく憶えていますか。

平山　力が入っていたせいか、最初の３レースは早めのスタートから混戦に巻き込まれてしまい、思うようにいきませんでした。しかし同県の先輩である小松原恵美選手に「スタートのタイミングは遅めの0.20でいいから、全速でいこう」と言われて気持ちが楽になり、４走目で初１着を獲れたのです。レース後には初1着を祝う「水神祭」があって、同県の先輩方に水面に投げられました（笑）。

植木　力が抜けたことで冷静に周りが見えるようになったわけですね。そして、初優勝を飾ったのも地元の丸亀でした。節目となるレースを大きな期待がかかる地元で迎えていますが、重圧を感じることはありますか。

平山　確かに気合は入りましたが、プレッシャーは感じませんでした。プロペラとモーターがマッチしたこともあり、走りに集中した結果として優勝できたことは本当に嬉しかったです。

植木　私は現役時代に「勝負はピットに入る前から始まっている」と考えていました。レースの直前ではなくて、ボートレース場に入る時点ですべての準備が終わっていれば、プレッシャーも感じないのです。平山選手は、その意味でも準備ができていたのだと思います。

ところで、この選手には負けたくないというライバルはいますか。

＊ 攻撃を組み立て、パスを出し、得点をアシストしていく、いわばチームの司令塔。ゲーム全体を見る力、ドリブルの巧さや俊敏性が求められる。

平山智加選手
Chika Hirayama

1985年7月13日生まれ。香川県観音寺市出身。香川支部所属。身長156cm、体重46kg、血液型O型。登録期：98期。登録第4387号、A2級。

平山選手の
プロボートレーサーとしての活躍

選手登録から2カ月後のデビュー戦、わずか4走目にして初1着をとって周囲を驚かせる。翌2007年11月には初優出、2008年5月には初優勝と、スピード出世で級別もA1に昇格。2009年の最優秀新人選手を女子レーサーとして史上初めて受賞した。デビュー・初勝利・G1初出走は、いずれも地元の丸亀ボートレース場で飾っているほか、デビューから3年と7日でのSG初出場は女子レーサーとしての最短記録を更新した。

2010年3月15日現在の通算成績は勝率5.97、優出24回、優勝5回。G1競走には67回の出走を果たし、SG競走には16回出走。

平山　同期の選手と、魚谷香織選手には負けたくないという思いがあります。特に魚谷選手は同い年で仲もよく、女子レーサーとして良いライバル関係にあると思います。

師匠であり理解者である
夫・福田雅一選手

植木　プライベートでは同郷の先輩レーサーである福田雅一選手と結婚されましたね。選手同士の結婚はボートレースの世界では珍しいことではありませんが、パートナーの存在によって何か自分自身に変わったと思える点はありますか。

平山　走りについての考え方が変わりました。思い返せば、以前の走りにはどこかに焦りがあったと思います。しかし福田選手と出会っていろいろな助言をもらうようになってからは、自分の長所を意識しながら冷静にレースに臨めるようになりました。

植木　福田選手は経験豊富なベテランですから、ボートレーサーとして彼から得られるものは多いでしょうね。平山選手にとって福田選手はどのような存在といえるのでしょうか。

平山　ボートレーサーとしての師匠でもあり一番の理解者といえます。困難や喜びを分かち合うことができ、いつでも相談に乗ってくれる存在です。仕事柄、自宅で一緒にいられるのが1カ月に数日しかないこともあり寂しさもありますが、お互いに信頼しあっているので非常に心強いです。

植木　私は、プロのレーサーが一番迷惑をかけるのが家族だと思っています。ボートレーサーは、つい自分のすべてをレースに集中させてしまいがちです。放っておいたら2日間でも3日間でも、ずっとプロペラの調整を続けてしまうような職業です。ただ、その裏には常に家族の支えがあるということを意識しなければなりません。

平山　やまと競艇学校にいた頃、講師に来てくださった現役時代の植木さんに、「一番大切なもの」について質問したことがあります。その時に植木さんは「家族」と答えられたのですが、ようやくその意味がわかってきたような気がします。

感謝の気持ちを忘れずに走る

植木　平山選手は昨年の最優秀新人選手に輝いたほか、全国スター候補選手にも選ばれました。今後ますます周囲から注目され、期待されていくと思います。

平山　選手として高い評価をいただいたことは非常に嬉しく思います。そして、今のままでは駄目だ、もっと頑張らないといけないという責任感が強くなりました。ただ、最近はレースでいろいろと考え込むようになり、状況判断がぶれていると感じています。もしかしたらスランプといえる状態なのかもしれません。

植木　ステージを駆け上がりながら結果も残し続けるのは簡単ではありません。そういう時は「今」を否定せずに、逆に今までやってきたことを信じることが大切です。それは決して守りに入っているのではなく、殻を突き破るために必要なこと。私もなかなかSGがとれない時期があり、ようやくとれたSGの表彰式でファンの方が涙を流していたのを見てはっとしました。「今までの私」を信じて、ファンの方は待っていてくれたのです。

平山　私も、多くのファンの方々に支えられて選手として頑張れていると実感しています。デビュー前から気にかけてくださった方や、デビューしてから注目してくれたファンの方々など、たくさんの方々への感謝の気持ちを忘れずに、観ていて感動できるようなレースをしたいと思います。

植木　平山選手のように女子レーサーが活躍することで、男性はもちろんのこと多くの女性ファンもボートレース場に足を運んでくれるのではないでしょうか。

平山　レースの迫力や面白さに加えて、女子レーサーとしての立ち振る舞いもこれからは大切になってきます。ボートレースの魅力を幅広くアピールすることで、様々な方にボートレース場に来ていただければと思います。

平山選手との対談を終えて……植木通彦

若手の女子レーサーとしてめざましい活躍を続けている一方で、今の自分がスランプかもしれないという迷いを感じている平山選手。さらに強いボートレーサーになるために、彼女は自分に何が必要なのかを見極める段階に立っているのだと思います。持ち前の明るい性格と負けん気の強さ、そして家族のサポートを受けながら、平山選手がこの先どのようにして殻を破っていくのか、その成長のプロセスを期待とともに見守っていきたいと思います。

植木通彦氏
Michihiko Ueki

1968年4月26日生まれ。福岡県北九州市出身。O型。登録第3285号。「艇王」「不死鳥」として知られる。通算成績は4,500走1,562勝。勝率7.58。優勝74回。2007年7月に現役を引退。

日本財団の紹介

日本財団
The Nippon Foundation

●日本財団に関する情報はこちらから

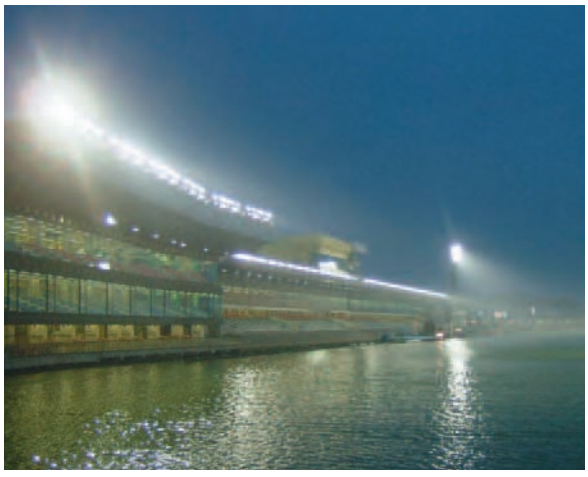
http://www.nippon-foundation.or.jp/

●日本財団会長　笹川陽平ブログ

民の立場から公への貢献をモットーに内外の現場で公益活動を実践。年の三分の一を海外活動に充て、海外情勢や時事問題など多角的視点から情報を発信しています。

http://blog.canpan.info/sasakawa/

全国のボートレース場紹介



蒲郡ボートレース場

蒲郡ボートレース場は全国で23番目となる昭和30年8月13日、初レースを開催しました。平成11年7月1日より、ナイターレースを開始し、現在では全レースをナイターで行っています。場内には全国24のボートレース場の中で唯一の回転寿司屋、その名も「回転すっしー」があり、値段ごとに異なる6色のお皿に載ったヒラメやアナゴなどの近海ものが絶品です。2010年夏放映予定の新CM「Battle of 6/BOAT RACE」〈ナイター編〉の撮影は、ここ蒲郡ボートレース場で行われました。

ADDRESS●〒443-8503 愛知県蒲郡市竹谷町太田新田1-1
ACCESS●JR三河塩津駅、名鉄蒲郡競艇場前駅から徒歩5分。JR蒲郡駅、名鉄蒲郡駅から無料シャトルバスで約10分。東名高速道路音羽蒲郡インターよりオレンジロード（有料）経由で約15分。

BOAT RACE 振興会
Boat Race Promotion Association

〒108-0073 東京都港区三田3-12-12 笹川記念会館　TEL.03-5232-2511　FAX.03-5232-2519

BOAT RACE振興会HP　http://www.kyotei-pr.jp/

オフィシャルWEB　http://www.kyotei.or.jp/